大川仁政録第三輯

三

へ13
3348
13

門へ 13
番 3348
巻 13

近世美談 大川仁政録 第三輯 巻之參

松亭主人編次

大正 年八月廿九日 寄贈
本大學出版部

第五回

父母憂人其子疾移外郷
君去津於祠怪引赤縄

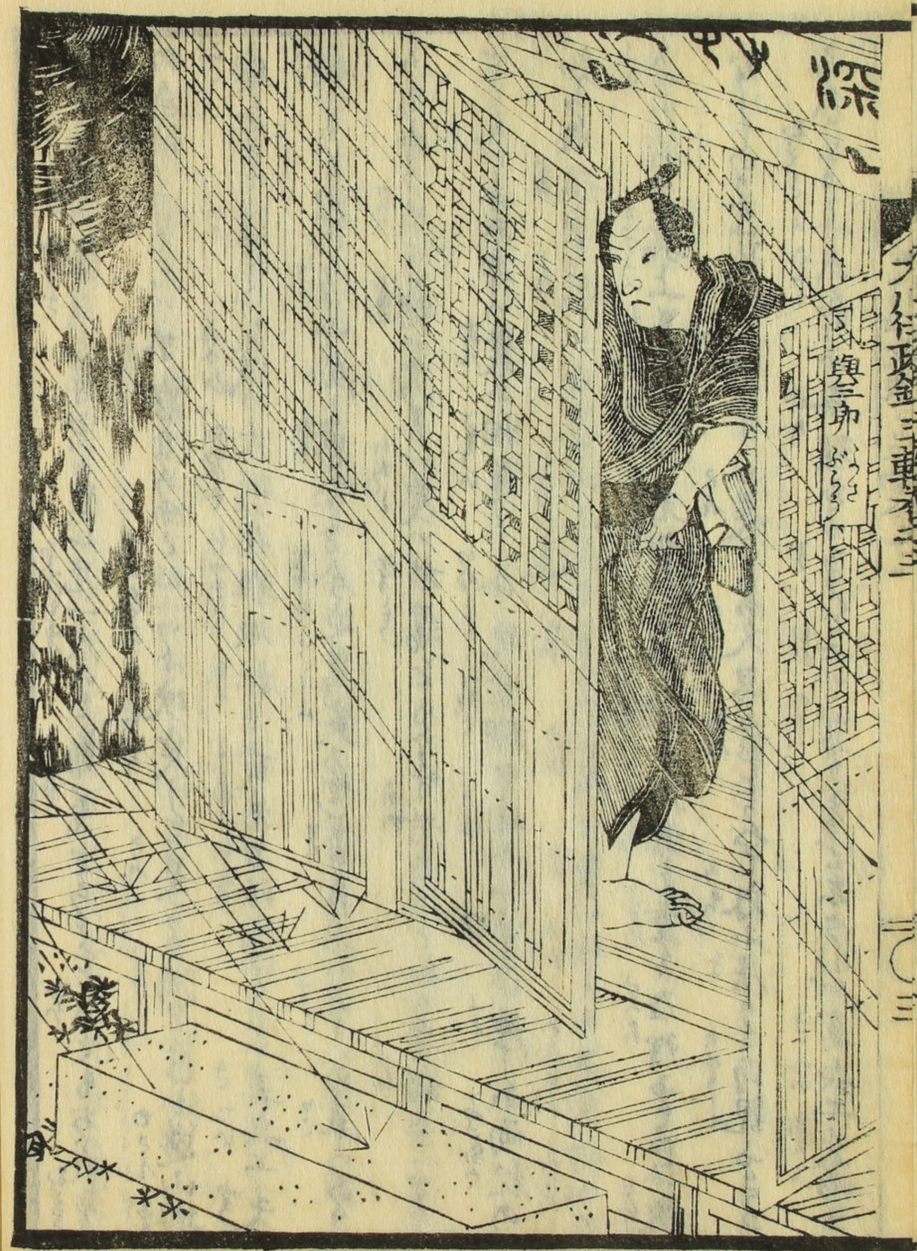
水の流と人の行末計りがたき物ゝ此へうり影元山町ゝ伊豆屋喜兵衛
ゞ娘与三郎へ先頃父り異見ゝ好む処の武藝を止め家業ゝ心を
入れ已まず万を顕はさず篤実ゝて召仕ゝ男女ゝ限らず出逢者ゝ
も懇ゝ深く萬事行届きゝ内外の者の思ひ付もよりゝ故両親共
大ゝ悦びさらぬ今年ゝ与三郎ゝ嫁とも貰ひ世を譲りて己らゝ隠居ゝん
心なり去ゝ与三郎此家へ来りし比田積家より付添来りし乳母

六七年以前与三郎十四五才の頃今い我身用あーと暇と取てさス
方へ再び嫁ーしが十四五年も已ぞ手あわふ子育て上し与三郎の
事なれば伊豆屋へ絶す出這り總州の田積家へも折々行て安否と
問ふり然るに此程例の如く田積方へ行ーふ門戸を閉て出へを留め
あるしぐ何事ぞやと思ひーが態々來りし事ー故中通ぐ密ふ義
門より入ま飛鳥對面ーて家の騒動細ふ物語り錦衾繋花
ふーて伊豆屋いとふ平廣く人出入も多き由なれば内々右の宝乃
詮義与三郎ふ心ぐ貫ろんと其方のうと迫文ふて申ぞ仕と思ひ居
ぐ我夫の仰すふ一旦伊豆屋へ参ー件ぐ方へ左様の事を申聞
若其事ふ心とがしぬ養家ぐ無暑ぞ子ぞもあり安ぐ去兵工へ對ーて

相済ず決ーて左様の事申ふ子ぞ思ひ止りさり
と物ふ成ふ乳母い驚き猶又委ーく様子と尋ね若手がりふも
成つき風説差りいぐ早速御知らせ申へきとふて暇を告て帰り居ぐ
早速伊豆屋方へ行右の次第与三郎ふのと物語り不君の思召ふて
和子様ふも内々誕義御心ぐある孫御頼ぞされ度思召の所大旦那
の御留あり由ありと申しぐ与三郎も大ふおろき何様危やうの品と
望もい一朝一夕の盗賊ぞい有ずド何ふも已よ両親の心配兄者人の
心のぐ事無ふんと俱ふ心と痛めぐ扨乳母も帰り跡ぞつくづくと
思案ーて思ふやう我も実家ふあるならば兄亘殿と俱ふ宝の詮義仕
出ー両親の心を安んぜんもと我幼少の時の過且ハ異人の我を相ぐて欽

難あり云々由ゑて父母の行末を案じ養父喜兵工殿の懇望ゑ任せ
此家へ来りし実父母の愛憐深き知り又今の二親の養育を斯人なり
るゑ誠ゑ此家の父母の恩恵海山ゑも比へ難き我来りてより手五郎
出生一今年ハ早十六才ゑなり生を付發明にして孝心なく此身ゑ
事欠くこと殊ゑ今年ハ我ゑ妻と娶ら色世をもめぐん心ゑ兵左ず少
ハ他へ行ら別家さすらり外ゑほじ与五郎ゑ此家の跡式議り玉ゑ我理と
思ひ故なゑ兵誰一も家ハ実子ゑ譲り度物ゑて先祖の血脈を絶さ
ざるハ是則孝の道なりさ我此家を出行ん丈ゑ父母も
其侭ゑ捨ほじ又実の父母も兼知仕玉ハ一とさらぬとさらぬ心を
者一ゑなるゑ此家の両親ゑ飽迄離別さを其上ゑ兄且ゑ力

とを宝の詮義ゑ為ほじ兄一人ゑて難義せらるゑと多くもわゑ弟
の余所ゑ見んハ本意ならずと心一つゑ決定して是ら酒とほじを遊山興
樂とのを事として或ハ大磯化粧坂杯と夜泊日泊ほるゑ喜兵工夫
婦ものゑほじるゑんと思へども今迄隠実ゑほるゑ少しの事ハ有り
ちなら若き時ハ少を一度ハ放蕩をもなす者なりと知らず顔ゑて過ぎ
ヒしら与三郎ハ業ゑ相違し今迄余程の金子を費ひ控しゑ両親の
知らぬ所ゑて処ゑ為ゑ此上又々多くの金子と費ひ捨んも是又此家の
為ならず其上弟の我と見習ひなば猶々不孝と重ら倫理ゑそのひ狡
なしゑゑ不孝と思ひしゑ是ら又思案とうて外ゑ居りて両親ゑさら
ひ弟与五郎ゑ無理なるゑと云て罵りなど去々小ば喜兵工夫婦も


與三郎

與三郎
深川の祠ホ
雨宿をして
お富と奇縁
結ぶ圖
お富

殆ど當惑して今迄実に孝心深く我々が申事を用ゐるまつたく
子三郎を哀と痛りしに近頃の有様見て定て余り心を惑
ひ故少し逆上の気味あるゆへ我々が手元を遠ざけ世間とも
に交を開らかざる所に任居させ見て何方へ
ゆきすべきと夫婦商議あり妻のいわく上總の木更津なる
鯉屋善右エ門へあの辺なら分限なり我身の従弟なれば此方へ
頼をやすべしとの事喜兵エそれうけん然らば計らひ玉へとて三
郎を其事一應申し聞せんとて傍近く招き其方近頃少し病
気の様に思はるゝ繁花の地に住居て余り気を労する故に
暫く田舎へ参り野廣き所にて保養いたし木更津に
鯉屋善右エ門へ母の従弟なれば其方に為なれば従弟違なりとて文
通あるて問音信もすなれば是へ頼をやるべしと思ひ行べき
やとのべ子三郎思ひ我近頃父母に能き人と新造に成まを
なれば父母の愛憐なるまを殊に次男なり一先彼所へ越
又手術もあるべしと心に決しを様に思ひ木更津へまかり
保養のよしとヤナ紋早速支度洞へ手紙を添へ人を付て遣ける
扨なる扱鯉屋善右エ門方にて思ひがけなく鎌倉なる伊豆屋与
三郎なり迎来り對面をなしば客間へ通し對面を乞に両親の書
状を出しなば見て驚の様なる病気故須臾地に保養の
とて呉うとの頼と大なり委細承知致し心置なく此方へ

逗留ス玉へとゆす故先ゝゝ逗留なすゝ日々なすべき用とそもゝゝゝ
あしま爰と出歩行見まゝゝ田舎の事ゆへ只野廣きのゝゆゑ見所も
なく七夕ばかゝゝ只実家の両親兄のゝゝゝゝゝゝゝ須此所ゝ日を
送りゝる爰ゝ又先頃五十嵐親子ゝ力をゝへ鈴ヶ森ゆゑ田積豆ゝ
仇あしる赤間源左エ門い此地の侠客ゝしゞ一年鎌倉ゝおりむさ
逗留ゆゑゝゝ婦多川の仲町ゝゝゝゝ所の藝者ゝ則深帰國の祈柄
藝者を引親方ゝ應對ス貰請て連帰り妻となゝ居ゝ名を
べ富とゆゑ年ハ二十の上を一ツ二ツゝゝゝ都めんゞ相貌艶ゝく仲町ゝ
一と指拔て一とゝ下らぬ藝者ゝしゞ心ゝ望をゝて源左エ門ゝ
從ひ來ス物なゝ去ゝゝ今年も早弥生の空とゝしゝ例年ゝゝゝゝ

暖和ゝて此頃いろゝゝも花の盛りゝゝ汐干をゝて遠方の花をあゞむ
るも又一興ゝゝ友を誘引て行べゝと源左エ門ゞ進ゝ任ゝを近き辺の
娘ゝゝど二人三人ゞゝゝ源左エ門ゞ子ゝの者共我ゝゝと俱ゝゝゝゝ
十四五人も手連て賀ゝゝ支度ス酒肴ゝ荷ゝよゝゝゝゝゝ
持行ゝ酒肴を歩開ゝを銘々十ゞゝゝゝ
來りて後の肴とゝゝゝと思々ゝ海へ遠く出て漁ゝ居ゝゝゝ
一人斯ゝゝゝゝゝ儀遑ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
傍ゝ集ゝ姫紫玉筆ゝと摘居ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
深く摘歩行て不斗向ゝを見ゝゝ得ゝゝゝゝゝ見事ゝゝゝゝ
餌を求ゝゝゝ其所此処と雀踊居ゝゝ何とゝゝゝゝゝゝゝ

鳥なりと傍らへ行ふとして驚きも見ず取へなびくらふもうづき
有様なりし故手ふ持る帛紗を冠せふ飛ぶみて向ひふまりし故又追
行てうづ少ぶ又ぶんの如く向ひあり斯する事度をそ我とこれ
く五六町も追行るにふぶち行ぶん影も見えぬ見失ひより其時東
の方より疾風颯と吹来ると等しくふ近一天晴渡り長閑なりし春の
日の俄ふ黒雲霞ひ来りし故元来し道へ帰らんとすふ多くの夏の
白雨の如く雨さへ頻りふ降出し雷さへ鳴り出し雷ふ辺りふ絶て
人家ふ臣ぶいんと思ふ辺遠所辺ふ小さき祠の見えぬ漸其処
ふたどり付祠の内へ走り入るふ目と射るごとき電の光りと俱ふ我を
忘れて祠の扉を引ふ閉もよらせぬ雷のおびただしく鳴ると

めき頭の上へや落ちうん地ひびきなふ夢中ふ成りづつとり下ふ
居とりふ何やら物の有るぶ取付と思ひしぶ跡へ何事も覺
えざりうう爰ふ又与三郎も此日天気もうらうらなりふぶそぞろ歩行
ぶんと鰹屋の小者一人連き此辺迄来りふ跡の茶店ふ忘れし
品有し故小者と取ふ来りし此辺ふ待合せりしふ俄ふ空合変り
雨降出て時ならぬ雷さへ鳴るぶ此祠ふ家前より入り雨を凌ぎ居
りふ又跡より誰やら来りて内へ入ると思ひしぶ雷いとあらあらへ
や落ちうんと思ひ者世ふ驚きて跡より来り者い其侭そこへ
倒きとり与三郎も我を忘れて打重り俯ふ伏て少時い我も
らぶ居とりしぶ此内不思議や奥まりさる戸帳の内より青気二

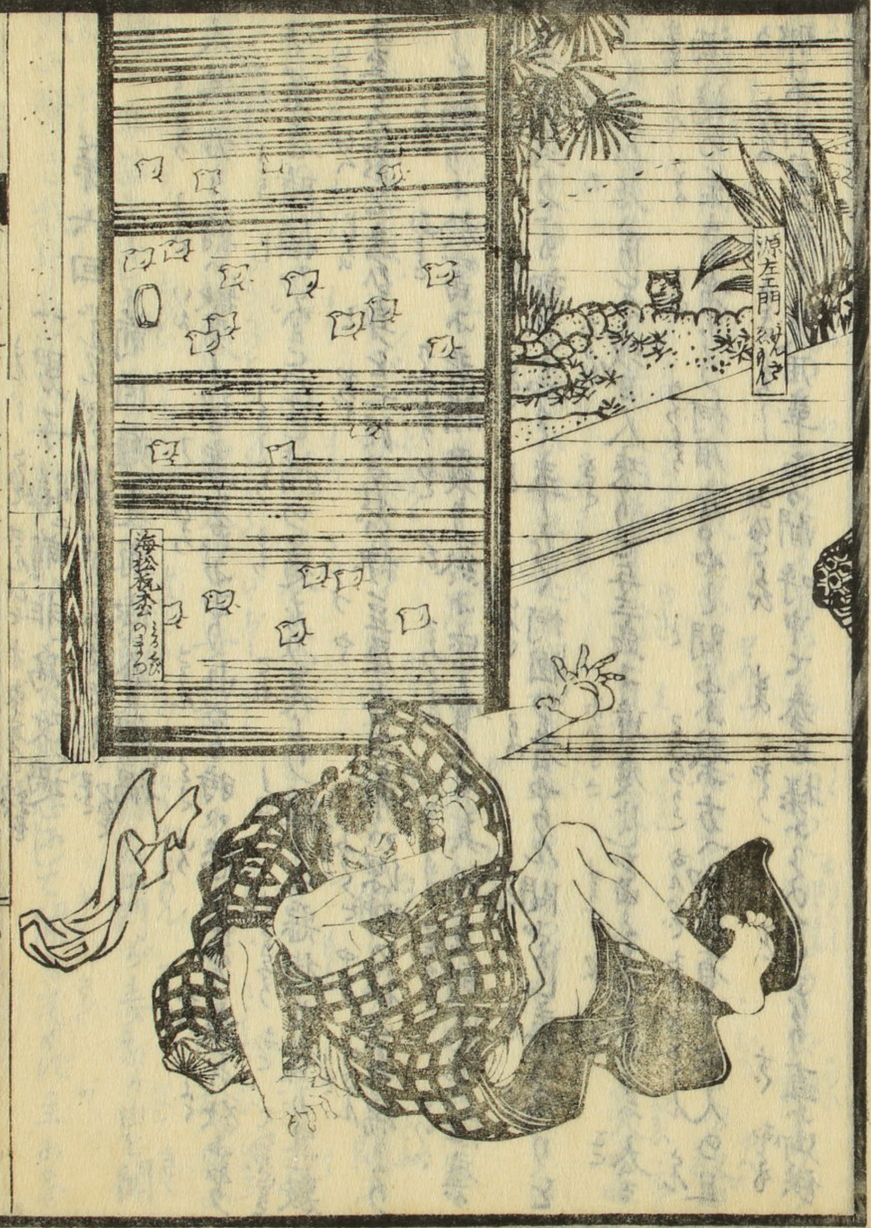
筋出ると見えしが此両人が懐ろへ入らんや有て与三郎心付これば若き婦女子の我膝の上へ仰向へ倒れ与三郎へ取付居らん女いかなる心付にか絶三郎も其上へ伏重り前後も知らず居らん女いかなる心付にか絶して居るを呼生んとすれども名の知れざれば噛々といろゆり動せど返答なければ水を与へんと立上らんと思へども取付る手を放さば詮方なければ胸を撫て槌尾の灸を打て居られどもとと息出あるさやとのひらめを見開き心付て体あて立上らんと思へば双方顔見合てとり与三郎が面を熟と詠て動きもやらで取付て手も放さらんが与三郎も女が面よく見るに年は二十ら其上へ一つも出さんと見えて髪の形い美らもの見慣鎌倉様の當世風へ結立面い世あり

凡実顔とやらもあて色い雪をも欺き眼中冷やかにて瞳爽なり与三郎も是を見て我を忘れて恍惚らもの有て女いかなる御方へ知られ共思ひなき御人の抱へて衛へ人心地付らり此御恩いかなる報ひ奉ん事も我とも最前の雨あて此所へ辛へられ今の雷へ驚かれて此時宜へ及び与三郎も今の雷へ驚所傍へ落しかやとのが妻へ今へ駒の裏き上れ見見五いとの彩らう欄間の隙ら天やらなる鼠一足頭の側へ飛下ばへお富へあふやとのひさめ与三郎へ取付らり与三郎も驚て お富と捉と引寄しが驚へ二人へ身を過へ悪縁とを結び初らりやく肩て雨も止み空暗渡りて日影も内へ入きが表の方へ大勢の人声して河堤へ行きしやらん見失ひて親へ取へ二訳なとの声の聞えなれば於富へ早く

祠と五出様子を語り鳥ふつゝれて虚空にとゞ来り雨を避んと此祠
ふ入らしが家前の雷あて積の爰今迄ゝ出来て居さりとの衆人ふ教
まゞ阿嫂ふ達て落付さり何方へ行ぢ人と所々方々と尋ねさり我々
遠く海へ出て魚いろ〳〵取得さりあまを料理て船あて又々吾妻ゝんぐ
来玉へと引連て海辺とさて連行さり子三郎い人々の之奈ぢ踏て
之出辺りを見るふ祠の軒ふ額あり深艸社とりふ三字を書さりいろ〳〵神
あやと思ひながら後乃方へ廻り見るふ楣の糸北二ツふ裂半い字ぢ居さり
扨い家前の雷の此木の本へ落ーたん実響の強さも尤也きと思ひ
あゞとへ来ぢが鯉屋の少者あゝ〳〵走り来り家前の雨ふ降ぢ雨異
持ぢ出るさりるなら子遅さりしとふ子三郎 我い又人家ぢ此祠あく

漸く雨と凌ぎさり去るあとも此小社ふ深艸社と印あれどのゞ此の神と祭
てさるのやらんとのゝ小者のゝ言さり此祠ふ深艸の少將さやらんとまゝ問
あて人さふ縁談の願ひとかるふ験有り迚泰詣もありさりしが
迚ざらい誰も参る者も少と答ふ何い怪れ我い此社あて雷雨
の難と助りさり迚遥拝しーあとと立去ーげさりあても家前
の婦女々ゞ事と問ーー故くく申ーー聞ーさり彼ゞ事も
問ゝんと思ふさち表ふ人音のさふ女の連のりのと見えて
周章て立いでーー少人問ゝぢりしゞのありをーき事をさう
ーと心ふ思ひ其日い鯉屋へ立帰ぢ於富ゞ事のされぐく
うつらく〳〵と日を送りさる

海松抗於富ホ恋慕なり源九工門ホ懲さる道
於富


源左門
海松抗於富

第六回

一男子悔二前非一爲改過
前因難免再密會招禍

人其若き時い警しむる事色あり壯なる時い怒る事あり老て欲あり
と若き時順ひべきい色情の道なり是より種々の惡行も發り盡數
不至て家を失ひ身をそこなはれば伊豆屋与三郎い深川の社の奇端より
しを頼りに於富に恋情發り終に密會して其侭立別れしが鯉屋が
家に帰へりても朝夕忘る事なく何因の者ゆゑん問ざりし事の残りを
しく思ひ居たりし或日人來りて与三郎に逢度はしと申に出て見れば大なる
酒樓の美き者なり何用なるやと問に我方へ御出有しい客人の旦
那に御目かゝり度用事ある間呼申て參る樣ふこのるなり直に御供

致すべしいざ御出有じと云ふまゝ御越あるまゝ相ひより
中い先々御出あるべしとの故美や先日の女をあらざるやと思ひ敬ふ
早速支度して其者と同道し行て見るに果してもろもろしく大に悦
び一別以來のことを語ひ扨早速に問べき事ありいざや我事とい
しく云ふ丸べ你の事も問あべしと思ふ中に表に人音ありおどろきて
出玉ふ故尋ねざりしが一体你いかゞくの人にて親父い何とのひ玉ふと問に
於富夫い跡にて申すべし先一ツ呑玉へとのひて酒宴と催しし互ひに余
程酩酊しる頃彼女の連來りし下女が計らひにて一間なる処に於て密に
積る物語とぞ其日い互別れなるが其時赤間源左エ門が妻ある由を聞
大に驚き我斗らずも心の駒の狂ひしより無忽にして聞も定めず主あり

者と私語しに一生の誤りなり譬へ妻子も妻子よ妻子も妻子よ若頼まるるん
時おいつまるるまでおなるべきも知れざると是より禍と思ひ切り再逢見ん
事と思ふさるに兎角不煩悩の止難くぞ有るるを於富は其後も人
人の目と忍び先日の酒樓より与二郎と呼ぶ者を留主なりと
いひて出も来らざ是非なく立帰りしが其後文を送りても
返るべきも長いつもり事やらん家早心の悪しと獨り思ひ沈しが
此と悪業迚又々文認めて持せ遣しける其文を今更御心変らせ
はる九様のなるべ始より御情あるを勝ら我身浅ましく
御戯ぶを実と改しふ悔て返らぬ事なりの御事を御心変りれ
らの御返なりと御聞ひ下されば是非もなくとあるを

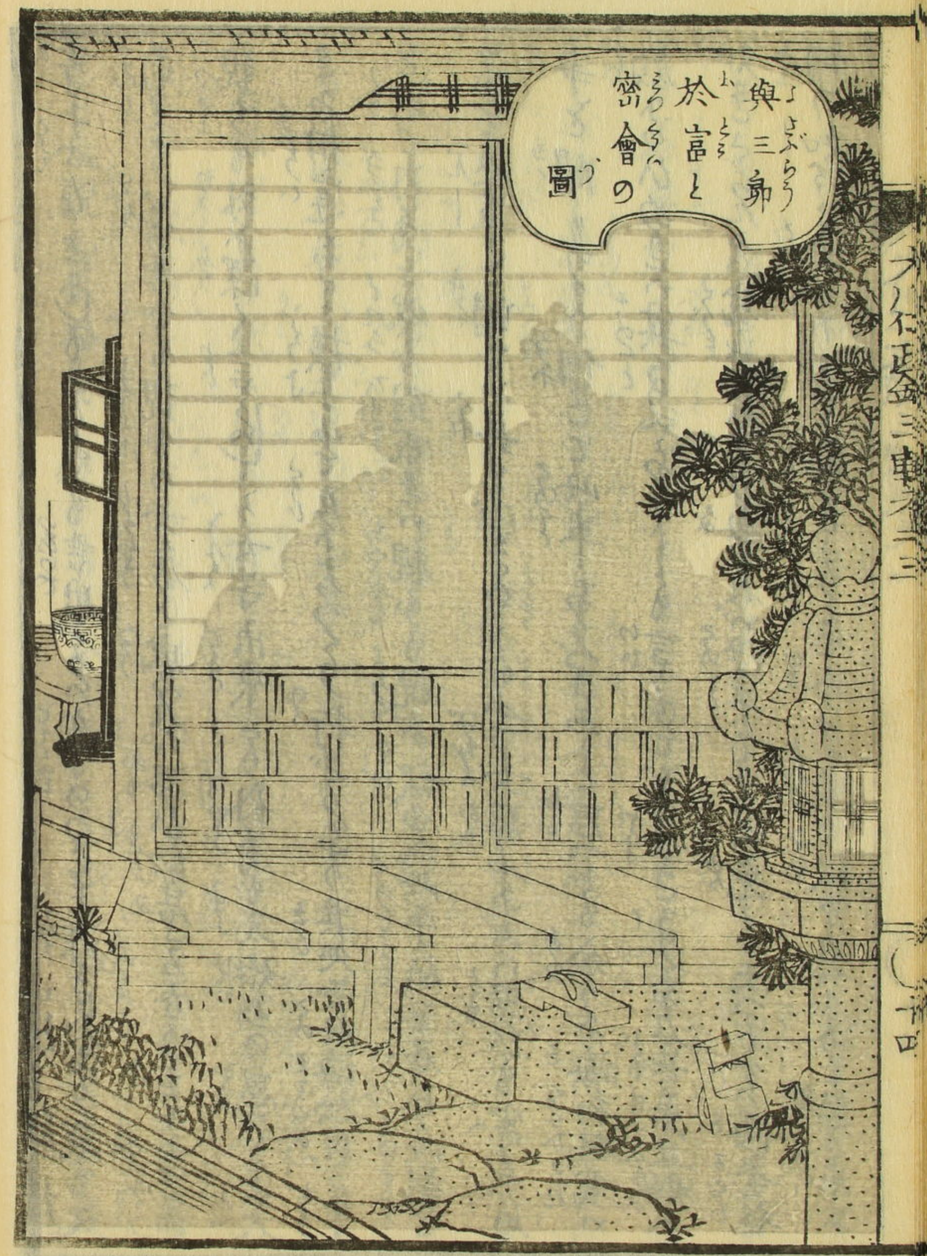
兎も角も相成り申すべく山を書き与三郎つぐと見て我心変
るるあらねども生ある者と知り故思ひ切るべく此由を委しく返事
をなしきるべきも又今一度逢て此身の無忍を保思ひ切すつきと
心を決定せしに太も其赤間源左衛門とかく此地の侠客なる由
へ聞るるの人物なるぶんと丈とかく赤間の様子と委しく聞序
の手代に長く者有て彼の兎惡をして博奕を好と真の
侠客なるからも子ら余多の親分と立られ此地計を悲し諸国
へ出て博奕を業とするを若已ぶ心を叶ぬる時い喧嘩を人を
疵付などする事度々あり去年も何まへ行しぶん子を五六人引連
て他国へ博奕を行しぶ物なるぶん五六日も過て帰り来りしを子を五六人

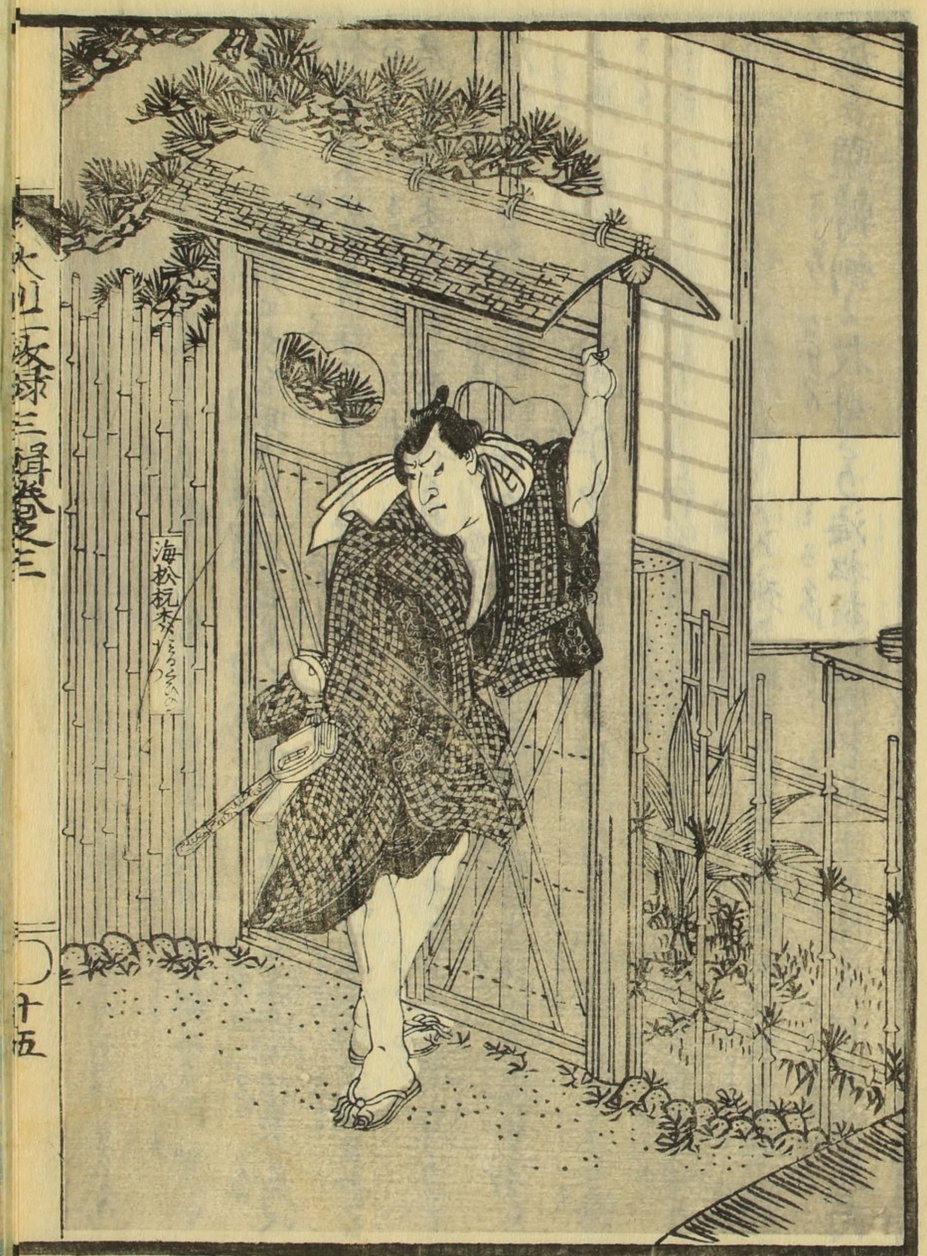
い矣らぬ跡を噂を聞ば其子ゝの武州鈴ヶ森にて殺され居る
よし其子ゝの身寄の者源左エ門ハ尋ねとれば我い途中にて別き
知らずと答へさしぐるあらん知らずとの事三郎吏いのゝ法の
事なるやと問ふ去年冬の事なりとのふさまれば乳母ゝ物語し
兄豆殿の鈴ゝ森にて室を矣ひし時第ハ待合せり若や彼女ハ
黨類ありやと不審思しうよ紀手がりなり今一度於富ハ逢て
其様子も尋見べし連添男の事なり日を知らざるもある
まじと思案を定め返事認めてをきる其返事ハ更ゝ心変りと
るあらねども是ハ段ゝ子細のあるなり抓を待て直ぐに物
借りやづき問よき首尾あらば便りあるべきは彼あり於富い此返

事を見て大ハ悦ひよ紀首尾ゆゑと心の内ハ待居う爰ハ又赤間
ゞ子ゝれ海松杭の松とり入る者あり其先源左エ門鎌倉へ行於富東
則深し時ハ彼ハ親ゝ源左エ門ゝ則
深相方とあり故力及ぶ是非なく已まゝ外の女郎ハ則深いつも
同道にて来り遊びし故於富ゝ別て懇意なり去るハ於富此
地へ来りても折ハ時ハよりて戯き給まふひ寄まゝ於富い又
る曲者故言も懲さぬ能ぬ海松杭ハ思ふ様
親分源左エ門い頭のゝ故何とぞ金銀の工面も出来ぬれば欲心な
きく心ゝ様ひ居べれども年も大ゝ違ひぬまゝ敢て好まぬ事
い有まじ故ぞ故ぞ我と親ゝと二人並べさらん出誰ゝ親ゝハ

従がふんと己が勝手に量簡付我却て元より勝手を親しくせしゆ
されば戯れまぎれに云出しても実と思ひて毎度誠の教訓となる
やさしく仕舞あり是へ人をやりて言はせさんか若否応の返事待
ならべしと思案して文を認めて赤間が下女の他へ出るを待て途中の
茶店に呼こみ其方にちと頼み有り頼まれて呉まいかといふと
下女何心なく我身に叶ひし事ならば何成とも頼まれ申すべし
といふに海松杭まづ早速の義知悉し是は少々なれども骨折代なりと
南鐐銀四ツ五ツ紙に捻りて渡し外の事でもなし親分の内義の
事なり我前々より懸意なり然るに何とぞ己が衷情を言ふなら
ずとも親分に内義の従ひ居るは全く身をまもらんが為計なり実は我

等に心なき訳にもあらねども言出ざるは女子のつゝしみ深き知恵あり我も又
前々より心あれども親分の女房と差控へ思ひ切居るなり去るに此節
親分も外に深く言ひかはせし女子出来し内義も又始めの思ひとは大
きに相違あるゆゑ様子見て互にあはれなり行ところあり其処で此海松杭が中
を取て内義を我が引取まづ親分も悦ぶ訳由へ此手紙を届け此訳を
いふて返事を聞てくれ呉まじきやといふに下女思ひのほかなる思ひも寄らぬ
事を聞ものかな何として此事あるべきやと思へども余りに海松杭我は
顔にのひぬきが其又にあらねども言うてそれ安き事にてあれ共若旦那に
知させらんには我身のひとり無なれば此事なり免し玉へといふ海松杭
何の知らるゝ事のあるべき知らせて今は通の訳なれば其のさのを怒る事に


與三郎
於富と
密會の
圖


海松杭矢

てらなり又義理といふものとなり我こそ十ぐる筋なりなりとなり
時ちの吃と礼いするなり是非も頼むとなりひるんで下女い新ゐもうがく
是非なく義引て文を取り立引きさりて扨一両日を過して無間ゐ留を考へ
行見るゐ於富い与三郎ゐ丸返事を操返し讀て満面ゐ笑を含
居さり海松杭扨い我文を見て居ちあゐ此様子あてい上首尾なりと
海松杭いさりと行て後ゐ抱付さり於富い驚き持ゐ文をくるく
と巻て袂へ引入ゐ推ゐり惡きゐ仕ゐたと振放さりとする海
松杭い放さじ我ゐりくとゐこの合居ゐ此時主源左エ門立帰り
門口ゐ此体を見て驚くと入来り物ものゐ海松杭ゐ襟首取て引
放ゐ頭轉倒と投付さり海松杭い怕り起上り見ゐ親ゐ源左衛

門い迎出さんとゐしゐ連も此体を見付ゐ迎さりと何ゐ
き品ゐ寄とゐ酒狂の上の戯ゐなりとゐひるめて任舞んと腹をすゑ動ゐも
ゐ扨へゐ此騒きのゐゐゐ於富い家前ゐ押込し文を取落しゐ海
松杭い是を見と我文なりと心得て源左エ門の目ゐ盗りゐ酒狂の上の戯ゐ
成ゐと手早く取て懐へ捻込ゐ源左エ門い心も付ゐ海松杭を見て
儲と白眼付いゐ海松杭已我妻ゐ不義仕ゐ横道者早竟女房ゐ
兼知ゐ我ゐを能ゐ若義知ゐんゐ我面へ泥を塗世間へ面ゐさ
心ゐ御ゐ心中の中ゐ已ゐ小ゐ生置奴ゐあゐ兵富ゐ義知ゐ
已ゐ仕合助てゐ小ゐ親公ゐ子ゐの義も是ゐ以來我家い足踏ゐ
事ゐゐと襟首取て引立て門口ゐ突出し跡ゐ切て外へ入彼奴い

子分の内なれども少し用ゆる立ばかり頼母しく思ひしかの存の外不見損じ
富ちがひ心底奈し我明日は職業を上州の方へ行はいかに
寸両三日の内に戻るべし留守を何分頼むなり譬へ我留守中なれども海
松杭は門口近き寄付べきなれば其方は如在あるべからず我口らの為及ばざる
女子共なれども気付き給へ一杯のみて其夜は心ゆく我家を酒飽くまで源左
左門は寐間へ入り於富は翌日の旅行の支度を入月の品取揃へなど
あるべき思ふに最前与三郎より来りし文我誤つて取落し取上げんと思ふ
内海委杭何と思ひやら手早く取て懐へ入れ入れ惡ければ
源左衛門の手に入れてまじきもの仕合なりき翌日中もせよ明る日中もせよ源
左衛門の留守の間に海松杭を招き寄日何となく欺きたまの文を取返す

べし源左衛門はいと親分子分の縁もきれ長く他へ行て出合ふまじ
彼は我が心あらば敵なれば奉ると心に思案しいたを驚くなく其夜は
其侭休みたり扶翼日あるなり名ばかり源左
左門は支度して留守の間の事なども人々に言置て其者どもを引連て出行
於富は源左衛門と申しやりて後今宵こそ首尾なり与三郎を呼て覚
と物語も除しなる心ゆかん其事も問べしと如斯の首尾なれば今宵は是非
そなべく御越下さるべき様支度は謹の例の通り下女に持せ遣り返事を聞て
帰るべしと言付なれば下女は文を持行与三郎に達て文を渡し如此く
とのひなれば然らん此今宵密に忍べしとの事故立帰りて於富に其
趣を告げ酒肴を設け日の暮るを待居り与三郎は

於富の文を見るに源左エ門は旅へ行て両三日留守なれば今宵是非々々
御ちゝ様の由なれば然らば今宵行て我思ふことを尋ねく物がたり始
無怨の言訳もせし又彼鈴を森あそび死せしことゆゑの子分の事も彼
知らざるを知らざるを尋ね見べしと文方みもたるこれが支度をして今宵は
孫ふたり帰りの遅ければと心合ひ手代おのゝ置て密に麹屋の内と立出
暫しの間窺ひて隙取り傍りも静りする頃密に赤間が裏口より音
なふに兼て合図なり置る事なれば下女立出て案内なす事ぞ於富
も立出ぬ部屋へ伴ひ今宵は心置なく寛々と落付て酒肴抔
出して下女は酌取りをさせ三ツ三ツ廻りて後下女を休ませ度々文を届
ても返り言さへなく打捨置るは定めて御心の変り平ならぬも

余りとは思へば実なき心底なりと怨むれば与三郎のるゝ左ぞあらば
決して心の変りはあらねども我始め伜が姿の艶なるに不こまりて
何国のことをも知らぬ無怨に絮りとあれども後に委しくきゝて
赤間の親分の妻あることを知まりたれば二人が中のゝ人の
知りたる時は親分の面目もかゝり又如何なる事に成行んもしれぬ
我心は今に伜の事を忘れんとすれども忘るゝ心くるしく後の
事と思ひて返事をせざるなり必悪くは思ひ給ひそとのべ
実宜ふ処もある事なれども後の事を案じて此様なる事のなる
べきこと我身元此家へ来しは少しく望をありて彼人に頼まる事あり
然るに其事を差引て頼母しく受合ひ故身を任して参へ来り

あゝ今ゝ我身の頼ミ〳〵事ハ言も出ず忘るゝ事ハ忘れ
事ハ後ゝ委物語申すべし〳〵斯る頼母し〳〵気のもき人かゝ迄う連
添待らん頃て眠を取て我身の侭ゝのづ方へなり共行ん心なり暫し
の間人目を忍ひて居なゝ追付心の侭ゝなるべし〳〵今更未練ゝ後悔
仕玉ふ事ゝ伝ハ思ひ切玉ふ我身ハ追も思ひ切ぬ
三郎も伝ゝ言心ならぬ少時の間ハ遠ざるとも我も何と思ひ切
るべきゝふん外ゝ又問度事もあれどゝハ又後の事ゝ
今一ツ過さゝと盃を取上ぬ於富酌して互ゝ頻て寐屋へ
ぞ入ゝる

近世美談　大川仁政録第三輯巻之参終